

Κ Ο Σ Μ Ο Σ

Vol. 10, No. 1 (No.29) 1975. 6. 30

私 と 図 書 館

学長 磯 村 英 一

図書館というと、3つの姿が頭に浮んでくる。一つは、高等学校への受験生時代に通った、東京の港区にある「南葵文庫」である。中学校が芝公園にあって家が品川だったので、学校からの帰途にあたることもあったが、この旧徳川家が残した文庫は、忘れ難い思出の場である。受験に必要な図書があるわけではない。図書館を勉強の場にしたにすぎない。しかし、学校に図書館などがなかったために、私にとって文庫はいつの間にか学校の一部のような環境になってしまった。

二つは、関東大震災で焼ける前の「東大図書館」である。近頃各大学に見られるような構造のものではない、アーチ型のホールのようなもので、窓も高く、ステンドグラスを通しての外の姿などは見られない。はじめに入ったときには洞窟に入ったような感じだった。しかし、そこで本を開くと不思議に落付いてくる。「幽幻」という言葉があるらしいが、いつの間にかそのような雰囲気はなかで、夜のおそくなるのを忘れたことがある。

三つは、数年前、ちょうどはじめて学長になる前に、半年余り、アメリカのハーバード大学に訪問教授としていた。一週一回の講義をすればよい。つき合いも少いから、ほとんどが大学図書館に通った。アメリカの大学では、図書館が中心であり、その内容で大学の評価が定まる。しかし私はその蔵書の豊富なのに魅せられて、何度か出口を間違えたことがある。そして大学の誇りは、そこには学生はもちろん。教師達にも尊敬される「館長」をもつことである。アメリカでは、コミュニティカレッジという言葉があるが、大学の図書館は、ときどき地域社会にも開かれる。

私の頭に浮ぶ図書館のイメージが、白山の大学図書館とどうつながるかとは別の問題だが少くとも学生にとって、思出となる設備にしたいものである。私はもう10年以上東京都の図書館協議会の委員をしている。大切な仕事の一つとして。

新館長に後藤辰男教授(文学部)就任

大島館長の2年9カ月の任期終了にともない、6月10日付で文学部教養課程仏語担当後藤辰男教授が新しく館長に就任されました。任期は2年です。後藤先生は、仏文科のご出身で、多数のブルースト関係の論文があります。

閲覧からお知らせ	2
教員の研究への 図書館の寄与	4
本学に学んだ人々 ④—赤松月船	5
公共図書館に来て	5~6
参考図書解題	6~7
投書箱から	7~8
日誌(3月~6月)	8

分館より

学科別新入生ガイダンスを試みて

我が分館では、本年度の新入生ガイダンスを各学科別に行った。館員がそれぞれの科をうけもち、利用案内（本年度から新しく作りかえた）の配布、図書帯出者カード交付請求書の配布及び説明、さらに貸出しの簡単な説明を行った。学生の反応はその場では顕著でなかったが、例年に比べて図書帯出票の申し込みが圧倒的に多い（一年生

に関して昨年一年間を通じて230件だったのに対し、本年は5月6日現在で239件）という結果がでた。数だけで学生の利用度をはかることはできないが、学生諸君においてはできるだけ帯出票を作って図書館を大いに利用してほしい。またこの方法を来年度も実施するかどうかはわからないが、これからよく検討してより効果のある方法を講じたい。最後に分館では、図書帯出者カード交付請求書を来年度から新しく作りかえることになり、閲覧係を中心に検討が行われ、その原案がほぼでき上がった。（小林）

視聴覚室の昨年度の利用状況

昨年度は、121日（8ヶ月）開室しました。コンサート、もよおしもの時間（正午～午後1時）には、一日平均で13.4人、ヘッドホンを使用する個人利用の時間（午後2時～4時）には一日平均で11.8人という利用状況でした。本紙、第24号（1974年2月発行）にも書いたように、座席数が20席ありながら、利用者が意外に少ないというのが実感でしょう。図書、雑誌などの資料に比べて、視聴覚資料は副次的な要素が強い（極端に言えば、視聴覚資料を利用して試験問題やレポートなどが書けるわけではない）ことや、現在のような限られた開室時間では利用しにくいこと、レコード・プレーヤーの台数が少ないことなどが利用者の増大をさまたげているのでしょう。コンサート・もよおしもの時間は、ポピュラー音楽などリラックスして聴けるものをプログラムに組み込めばもっと多くの人に聴いてもらえるのでしょうか…。

参考までに、個人利用の時間に、よく利用されたものを紹介しておきます。

A 作曲家別……①ベートーヴェン②バッハ③チャイコフスキー④ワグナー⑤モーツァルト⑥シューベルト⑦シベリウス⑧ブラームス⑨ドヴォルザーク⑩ヴィヴァルディ

（注・早稲田大学視聴覚室における、昭和47年度の調査では①ベートーヴェン②モーツァルト③バッハ④ブラームス⑤チャイコフスキー⑥ショパン⑦ドヴォルザーク⑧ショスタコーヴィチ⑨シューベルト⑩ブルックナー）

B 曲名別……①ワグナー「ニーベルングの指環」②ベートーヴェン「交響曲第9番」③ベートーヴェン「交響曲第7番」④ヴィヴァルディ「四季」⑤ベートーヴェン「交響曲第3番」⑥同「交響曲第5番」⑦同「ピアノ協奏曲」⑧バッハ「管弦楽組曲」⑨ビゼー「アルルの女・カルメン組曲」⑩ベートーヴェン「交響曲第6番」⑪同「ピアノ・ソナタ」

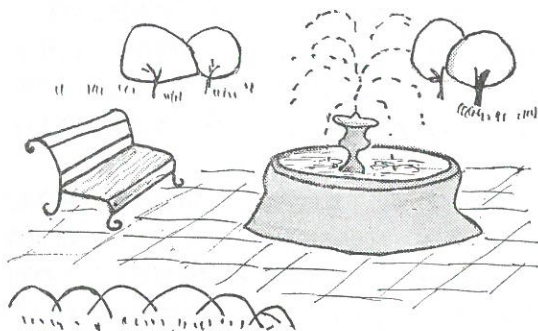
C クラシック音楽以外でよく聴かれた資料……「ポピュラー音楽大全集」「映画音楽大全集」「民族（俗）音楽各種」「日本の吹奏楽（コンクール実況）」「時事英語研究ソノパック」「英単語テープシリーズ」「フランス語の基本構文」「田崎英会話練習帳」

（注1）オペラなど1曲についてレコード枚数が2枚以上のものは数回にわけて試聴されたので、総件数が多くなっている（例・ワグナー「ニーベルングの指環」など）

（注2）全集もの、協奏曲、ソナタなどは一括して集計した。

そのほか、当室の活動としては、当室の企画によって①「日本史探訪（NHK・TV）の録画と放映②美術スライドの映写③16ミリ映画映写会④大学祭参加コンサートを行い、授業やサークル活動などで、のべ13件の利用がありました。オーバーヘッドプロジェクターを活用した授業や、音楽関係のレコードやテープを使った授業などは、今後の視聴覚室の方向を示すものとして貴重な試みといえましょう。（視聴覚室・伊藤）

ふらぎでりぶろ



上原専祿著

クレタの壺—世界史像形成への試読—

(評論社) 204.9:US

今年75才の著者は、戦前・戦後を通じてドイツ中世史研究の第一人者であった。同時に氏は、世界史認識の問題を歴史認識の最前線に押し出し、自らその方法、意味、理論を追求しつづけている現役の歴史学者であり、歴史的精神の体現者そのものでもある。戦後の激動期における一橋大学学長として、50年代から60年代初めにかけての指導的な思想家として、さらに又名著「世界史における現代のアジア」その他の著者として、早くから現在の世界状況の到来を見通しつつ、局面打開の努力を重ねてこられたことは記憶に新しい。

いま、われわれのまわりには歴史書のたぐいが掃いて捨てるほどある。しかし、歴史を根底から考え直し、そこにおのれの「生」の意味とあかしを求めようとするならば、読むに耐える歴史書は激減する。ほとんどないといってもよい。

本書は、そのような希求にこたえ得るすぐれた歴史書の典型であり、純度の高い歴史的思考の入門書でもある。内容は、1. 十種の典籍、2. 「永遠の古典」、3. 世界史への姿勢、4. 世界史の核、5. 本を読む・切手を読む、にわかれている。1. は、えらびとった古典史料の明示であり、2. は、それら古典を永遠性と歴史性のはざままでとらえた鋭利柔軟な方法の提示であり、3. は世界史の認識主体の問題性を重厚精緻な文体でときあかした具体例であり、4. は切手をも手がかりにして世界各地と世界史とを結ぶ脈脈をつぎつぎにボーリングした小品15篇からなる。圧巻は、5. の自伝的読書論であろう。氏はここで初めて、たぐいま

れな読書論を展開し、自らのふみしめてきたはるかなる思想的道程をふりかえっている。この部分は書き下し100数十枚の佳篇であるが、50年代初期の論稿「ファウストにおける『不満の念』」に付せられた長文の補記とともに、氏の省察力の深まりと、痛痕の念のはげしさが、読む者の心を衝ってやまない。昨年刊行の「死者・生者」において沈潜し、原点をとらえなおした氏が、世界史認識への翼をひろげ、ふたたび壮大なはばたきを開始したことを心から祝福したい。

(文学部教授 田中陽児)

羽鳥裕久著

確率論の基礎 (コロナ社)

(発注中)

わが国でこれまで出版されている数ある確率論成書中、代表的なものということになれば、伊藤清著「確率論 (岩波, 1953)」, 河田敬義著「確率論 (共立, 1948)」があげられようが、これらは理工系一般向きのテキストとしては可なり程度が高いので、数学専攻の一般学生がこれを読んで実際の問題に応用することは相当困難であるといわなければならない。さても近年とみに応用確率論の出版が多いなかで、確率論の基礎概念とその応用を学ぼうとする大学上級生及び大学院初年級の格好のテキストとして私は躊躇なく羽鳥裕久著「確率論の基礎」を推薦したい。しかし対象を限定する必要はない。初等解析学の一般知識さえあれば、普通の応用科学を志す人でも容易に理解できる読み易さを本書はもっている。あくまでも無理のない推論の自然な流れが、知らず知らずのうちに次第に数学的に厳密な推論法が習得できるように工夫されている。

要するに最も大きな魅力は、その独特な構成であって、往々にして複雑なものになりがちな確率過程の理論はわざと省き、また基礎確率論の抽象的な理論の解説においても徒に確率論的な意味の強調に終始する天下りな説明を避け、多方面の豊富な実用例を用いて実際的な意味づけを行ない、更にまた諸々の基本的な問題を例題の形で提起し、問題の意味を明らかにした上で、具体例の議論からスムーズに一般論へ進む手続きがとられている。現代確率論を理解するには、ルベーク測度

論の相当程度の予備知識が必要であるけれども、本書は数学専攻でない人々をも考慮に入れて、そのような予備知識がなくても読めるようにルベグ式の測度や積分について必要なところで初歩から丁寧に説明しながら、一通り現代確率論の基礎概念がわかるように構成されている。本書は演習問題をつけていない。思うに、計算練習ならば豊富な例題から解法が類推でき、基礎概念の理解のためならば、本文を読むだけで十分ということであろう。評者も著者のこのような構成意図には基本的に賛成であり、確率論全般を一通り概観するには、本書に上記の二冊を合せ読めば十分であろう。詳しい内容については直接本書を読んでいただくほかないが、目次とチャプターだけを紹介しておく。目次：1 確率、2 確率変数、3 平均値と分散、4 大数の法則、5 母関数、特性関数、6 法則収束、中心極限定理、7 条件付平均値

結論としては、確率過程の理論ではなく、確率論の基礎概念の詳述を主眼として書かれた本書の目的は一応達成されていると言ってよいと思う。最後にこれは評者の勝手な欲張った注文かも知れないが、初学者のために本書の基礎理論をもとに現代確率論の将来の展望についての解説がほしいと思う。将来、この解説が加えられることを期待したいものである。(工学部講師・吉本武史)

教員の研究への図書館の寄与

分館長 山下 忠 孝

1970年代は情報化時代といわれる。とくに新しい情報の影響を最も強くうける科学技術の分野で活躍する者にとって、研究の成果と能率を高めるためには、必要な資料を広範囲に、敏速に収集することが必要である。

私どもが新しい研究を開始しようとする際には、まず索引書とか抄録誌などにより、先人の関連業績を系統的に調査することから始める。これは研究の重複をさけ、効率をあげるのに不可欠である。さらに研究開始後も常に最新の学術雑誌を調査し、関連する文献を収集し、自分の研究に反映させる。このように、科学技術の研究にとって、学術雑誌の比重はきわめて大きい。

最近、科学技術の専門化と細分化が次第に進行し、投稿論文数も飛躍的に増え、学術雑誌の数も増加しつつある。大幅な予算増を期待できぬ私学図書館としては、各教員の研究に必要な量の学術雑誌を用意することは、インフレの高進と相まってますます困難になる。

工学部の図書予算に占める学術雑誌費の割合を例にとろう。昭和45年51%、46年49%から47年65%、48年68%、49年67%と図書予算増額(この間30%)にもかかわらず、学術雑誌費は増加し、この三年間は全予算の2/3を占めるに至っている。当然教育研究用の一般和洋図書にしわよせが生じ、その不足分を実験実習費、教育研究補助費で補填することになる。この額は500万円をこえ、実験・研究費に影響を与えている。

分館としては早急に対策を講じねばならない。第一は最低限値上がり分に相対するだけの予算増加である。第二は目録、索引、抄録、総解説、展望といった第二次資料の充実と活用であろう。たとえば筆者の専攻する有機化学の分野には、Beilsteinの有機化学全書(独)とか、Chemical Abstracts(米)とかのすぐれた、索引書、抄録誌がある。前者は1910年までの主編27巻と、1919年までの第一補遺14巻と、1929年までの第二補遺27巻と1949年までの第三補遺(未完)からなりたつ化合物事典であり、独特な検索体系は利用者にとりきわめて有益である。後者は、1907年以来刊行された、世界各国からの約12,000もの雑誌類に発表された研究論文、特許などの抄録書であり、約70年間の世界の研究を網らしている。このほかにもBritish Abstracts(英)、Chem. Zentralblatt(独)、日本化学総覧、科学技術文献速報などといった抄録誌があり、これらの活用により学術雑誌の不足はある程度補うことができる。しかしこれら索引書、抄録誌には1~2年のtime lagがある。第三は、関連図書館との横の連絡を密にして、有無相通ずる体制の確立であろう。現在分館は教員に対し、新刊洋雑誌のContents serviceを実施しているが、このContents serviceを他図書館との間で行なえるなら、前述のtime lagはcoverできるし、研究体制への分館の寄与は更に大きくなるであろう。

(工学部応用化学科教授)

《本学に学んだ人々》—④—

赤松月船

ぐらたらで美しく

私の若い時代は、不勉強で、出過ぎ者で、自己規律の至って足りない我儘者といえ、それが一番当たっているでしょう。

溪声台の当時の私は、従って、決して真面目な学徒ではなく、学校にも迷惑ばかりかけた筈であります。

国漢文科に籍をおいていたのですが、何一つこれといって学習に精出した記憶がありません。今にして、それを悔んでいるのですが、半世紀に5年を加えた年代をへだてての現在では、ほぞを噛むも及ばずで、まことに慚愧の極みであります。

同じ学級の人であったかどうかは、定かではありませんが宮西一積氏の記憶がはっきりしています。今の天龍寺管長関朴翁さんより、前に管長になれる人であった村上独潭師、年も十も上でしたが、同じクラスでありました。印可を得て、それから後の学生々活でしたが、この方のアドレスを訪ねて見ると、堂々たるお屋敷で、学校での村上さんとは打って違って、短軀ながら老々大々として、私など、へえーといって恐れ入って了ったものです。後に橋本関雪画伯の別荘をもらって、寺に直された。天津市の逢坂の関ときいています、健在であるかどうか。

教授では、土屋鳳洲先生、聞えた漢学の大家でありましたが、講義は分りやすく、又親切でありました。ところが、講席に侍しながら当面の学課については、こちらが懶惰そのものと来ているので先生からは仕方のない奴だと思われたに違いありませんが、先生毎朝起きると、庭に出て槍をりりうしごいて稽古をせられるお話を、これは面白い！ そういうことしか脳裡にのこっていません。

田部重治先生からは、どの学課を担当して下さったのか、それも忘れて了っているのですが、ウォーター・ペーターのルネッサンについてのお話は、たいへんためになりました。これは恐らく先生のお宅を訪ねたり、坂戸栄氏がタクトをとっていた文学会の集りでの謂はば課外での雑談

からの享受であったかも知れません。静かな口調で切々として語られた先生の風貌は素朴而又繊細で、深いものでありました。

勝承夫氏や岡村二一氏や山本和夫氏、その他白山文学の方々は、学校のことと、詩のことが混融して、一しょであったのではないが、一緒になって了って、それに何としても詩人としてのつながりが、あまりにも親しく、久しくお目にかからぬが、在りし時のそのまま、ぐらたらでもあり美しくもある。やはり詩はよきかな！ 詩人の仲間はよきかな！ であります。

教授の先生方、それぞれ篤学の方ばかりであったが、国語漢文又佛教の各講目、このごろになって、あももっと教えを深く受くべきであった。このごろ漢詩をやっているの、特に「感深し」であります。教務に郷白巖という方があった。「しよりの無い」私を、よく見守って下さった。御礼を申し上げたいことがいろいろあります。

× × × ×

著作：詩集—秋冷、明るきセレナード、新しき詩の作法、評論集—芸術家と社会運動、禅十二講など

公共図書館に来て

昭島市民図書館

館長 梅 沢 璋 汎

このたび、昭島市民図書館に勤めが変り、住みなれた大学の図書館を、公共図書館の立場から見る事になろうとは、思ってもみませんでした。

市立の図書館といっても、スマートな三階建て、小さくても白亜の独立館です。従来の図書館のイメージを破った、ユニクなもので、一言で言えば、本屋さんの様な雰囲気を持った図書館です。貸出冊数は年間50万数千冊で、人口が8万4千人ですから市民一人当たり六冊の本を読んだ計算になります。

勿論、大学とは、資料内容も閲覧・貸出方式も違いますが、利用者である市民の側に立って、いろいろ考える事にしています。ですから、どうしたら図書館に来てもらえるか、貸出が伸ばせるか、希望図書が速く渡せるか書架に新しい本をと

か、幅広い市民層がお客様ですから、資料の選択は重大な仕事です。大学図書館について言えば、保存図書館の性格と日進月歩の諸科学の新鮮な情報提供と言う二本立て目標を持ち、学問・研究という立場上年毎に収集する資料集団と従来の所蔵図書との関連性というか、歴史性と言うものを、分類・整理していくわけが大変な仕事です。そのなかにあって、東洋大学・図書館も開架による方式を取り入れています。この開架図書資料を更に充実・発展する必要があると考え、思いついたまを記してみました。

(一) 選択委員会の機能について

毎日数十点の現在の出版状況での、毎月一回の選択選定では能率的ではない。出版ペースに合わせる様転換をはかられたい。又それに伴って委員会の性格でもある。結論から言うと収書の基準とか配分された予算を資料ごとに区わけし大枠の決定とか、読書傾向の指示とか収集の軌道修正を検討していく様な性格にし、あとは館員の館内選択委員にまかせた方が実際的である。

(二) 選択の実施

まず出版ベースと合わせる為には、書店との関係もあり取次店規模の書店が必要になる。それは、見計の資料を少なくとも三日に一度ぐらいの速さでの納品が必要である。閲覧職員を主体にした館内選択委員会を作り、30分～1時間ぐらいで選定し選択委員会にリストで報告する。

(三) 整理の簡略化

資料の新鮮さが要求されている現在、開架方式の精神を生かし、5万冊程度の資料を最高にし順ぐりに、閉架に転換させ、分類は、三桁、著者イニシアル順ぐりで配架し目録は事務用だけで著者目録で十分利用者には満足してもらえるのではないかと思う。でないと、利用者は遅れた情報しか受けられなくなり、開架方式の意味が半減する結果になる。本格的な整理は、この間、合理的な方法で処理・検討すべきだと思う。

私も15年近くも、東洋の図書館に籍を置きながら、何の一つ出来なかった反省をこめて、しるしたが、一概に新鮮さだけではないけれども特に公共図書館の場合では、その書架に、いつもつかわれない本が並んでいると、市民が図書館から、一人へり二人へりして、来てくれないさびしさがあり、この事を考えるならば、なりふりかまわず、三多摩流儀の図書館がここにあるわけです。

(筆者この3月まで図書館整理課長補佐)



参考図書の解題

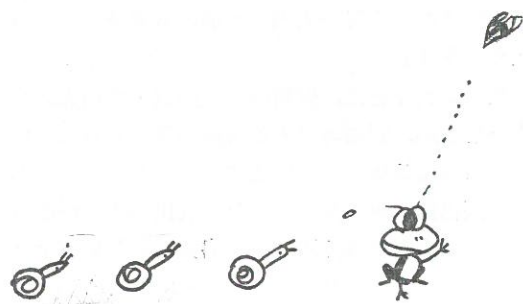
—経済学関係(1)—

①大阪市立大学経済研究所編

増訂 経済学小辞典

岩波書店

大阪市立大学経済研究所(旧大阪商科大学経済研究所)は、戦前に「経済学辞典」全7巻(請求記号330.3:OS:2)を編さん出版しましたが、もっと手ごろで便利な小辞典をという要望に応じて戦中に企画しましたが果されず、昭和26年になって初版が出されました。その5年後、増訂版を出し以来現在まで10版を重ねています。内容は経済学の基礎的概念を中心として隣接の社会科学の諸部門も含み、「読む辞典であると同時にひく辞典」「テキストと辞典」の両者を兼ねそなえることを目的として、重要性の大きい問題に関しては各国別に説明するなどの配慮がされています。また、価値・資本等の重要項目についてはマルクス学派と近代経済学派の両方の概念をとともに収録し



ていることもこの辞典の特色です。各項目の末尾には文献が紹介され、巻末には和文・欧文事項索引、和欧人名索引があります。

(請求記号330.3:O:4)

②経済資料協議会編

経済学文献季報 Vol. 1—

有斐閣

本誌は1956年に、東京大学社会科学研究所をはじめとする、主として国立大学経済学部、経済研究所等当時大学を会員とする「経済資料協議会」から編さん、発行されたもので、現在もお継続し刊行されています。

収録されているものは、日本文献の500余誌に掲載された論文と記事、および和文の単行書と、中国・欧米・ソ連邦の文献も雑誌論文に限って収められています。国立国会図書館から出されている「雑誌記事索引—人文科学篇」は経済学関係の収録雑誌。点数など限られていますが、この点収録誌数ははるかに大きいものです。その範囲は経済学とこれに関係のある分野が含まれ、社会科学関係の文献目録として、現在もっともすぐれているものと評価されています。主題から関係論文を探す人は巻頭の分類から、著者から探す人は巻末の著者名索引があります。なお、中国文献は20号(1960.10~12)を最後にのせなくなりました。

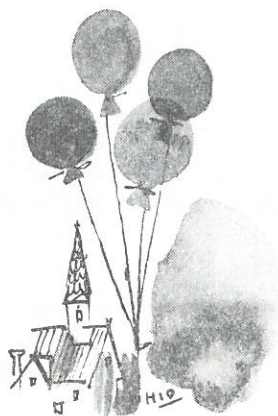
(請求記号330.39:K)

—工学部関係—

The American Chemical Society 編

Chemical Abstracts

Chemical Abstracts (以下CAとする)は化学分野における世界最大の抄録誌である。現代はおびただしい量の情報があふれているが、CAはそれらを整理し、まとめあげると言う時代的要求に迫られてつくられた雑誌である。CAは世界各国(その国数136,言語別では44ヶ国語)にまたがって発売される化学分野の雑誌論文、学会やシンポジウムなどの議事録、学位論文、研究レポート、又単行本などを網羅し、その一つ一つを要約して、平均約150語(欧文)ぐらいの抄録とし、それに書誌的説明をつけている。それらはあくまでも各論文の基本的情報を伝えるためのものであ



り、批判とか評論的なものとかは入っていない。時代の進歩に伴って収録件数は年々増加の一途をたどっているが、1973年では遂に32万を越えた。それらの抄録は大別して80のセクションに分類され、各セクションの中では、1:雑誌論文、2:レポート類、3:特許、の順に配列されている。CA本文は1冊約1000頁近くの週刊である。

雑誌に化学関係の論文が発表されると、その3~4ヶ月あとにはその抄録がCAに紹介されると云うスピードであるが、更にその速さをあげるために様々の工夫がこらされている。例えば物によっては雑誌の完成をまたずに、校正の段階で論文の写しを入手したりすることもある。

工学部図書館ではCAの配列されている棚の前で、役員や学生達が、自分らの研究しているテーマについての参考資料を調べるために、幾冊もの部厚いCA誌を開いている光景はめずらしいものではない。この記事は笹本光雄著「Chemical Abstractsの使い方」を参考にした。



投書箱から

館内に公衆電話を設置してほしい。(2件)

(係から)現在当館内には公衆電話が設置されておらず、利用者の皆さんにかなり不便をかけているようです。まず、投書の意を受けて、さっそくこの問題の調査検討に入りました。これを近辺他大学の現状を見ますと次頁の表のとおりです。

	有, 無	台数	設置場所	備 考
青学大	有	1	入 口	同所に3台にする案あり
慶 大	有	1	学生談話室	
中 大	有	1	カウンター	
早 大	有	2	館内軽食堂	利用実態把握できず。
立 大	無			設置したいが適所なし。
明 大	無			以前, 入口に設置したが本体ごとの盗難, いたずらがたえず現在は撤去。
駒 大	無			設置の予定なし。
法 大	無			同 上

この調査を直に当館にあてはめることは、各館の諸事情や構造上の相違がありますので、一概にできませんが、利用者が年々増加している現在、設置は当然とも考えられます。

さて、設置するならば次の理由で3階の学生休憩コーナーが適当でしょう。

1. 他の利用者に対する迷惑が少い。
2. 盗難防止等の管理が容易。

他に2階ロビー、図書館入口の案がありましたが、前者は繁忙期(試験期間中)に複写機の利用が増大し、相当の混雑が予想され適当でなく、後者は明治大学の例にあるように管理の面において心配があります。

設置台数については915席の規模を持つ当館では2台が利用上適当と考えられます。

このように当館に設置した場合を考えてみましたが、1. 現在の社会は電話抜きにできない。2. 利用者は1, 2号館まで足をのばさなくてはならず不便。3. 他大学でもすでに設置またはその方向にある。これらの要素を考慮に入れて、検討し設置の方向で関係諸機関と協議していきたいと考えています。

分館長紹介

都淳一前分館長の急逝により、任期半ばですが、昭和50年4月1日付で、工学部応用化学科山下忠孝教授が分館長として就任されました。

日 誌 (50年3月～6月)

- 3月10日 私大図協東地区部会(於私学会館, 世良出席)
- 20日 経済・経営研究所の発展的解散にともない、それまで所蔵していた資料(主として雑誌・紀要)443点の寄贈を受ける。
- 24日 運営委員懇談会—昭和50年度図書館予算などについて意見交換—
白山連絡会
- 31日 梅沢璋汎, 神杉玉枝(ともに白山勤務)退職
- 4月1日 山下忠孝工学部教授, 分館長に就任, 新入職員で3人が図書館勤務となる。
植田泰子(図書課), 高石ひとみ・飯山敏子(整理課)
- 19日 運営委員会—昭和50年度図書館予算ならびに図書費の配分などについて審議—
- 22日 白山連絡会
- 23日 東洋大学校友会より, 「所蔵目録」第2, 3巻に対し, 学術研究助成金を受ける。
- 26日 私大図協「書誌学分会」
- 5月7日 人事異動(5月7日付)鹿島仁郎・島田昌幸整理課勤務, 生野幸子・大和田テツ子図書課勤務となる。
- 12日 図書館関係会計監査
- 20日 白山連絡会
- 27日 図書選択委員会—50年度予算の配分ならびに執行方針などについて審議—
- 6月10日 後藤辰男文学部教授, 館長に就任
- 11日 私大図協東地区部会(於東海大校友会館, 鹿島出席)
- 12日 新旧館長事務引継

編 集 後 記

今号 Vol. 10 より, 編集委員も変り, 不慣れではありますが, せい一杯やりたいと思います。ご意見, ご感想等を待っていますのでヨロシク!

(板場, 大和田, 江澤, 小林)